長岡京市文化財調査報告書

第 66 冊

2014

長 岡 京 市 教 育 委 員 会

編 集　公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

（1）勝龍寺城北東の南西部土塁・空堀残存状況（北東から）

（2）土塁構築面からの掘り込み SD02（東から）

井ノ内車塚古墳第６次（長岡京跡右京第 1068 次）調査

（１）調査前墳丘の状況（北西から）

（２）２トレンチ埴輪出土状況（西から）

序　　文

私たちの長岡京市は、豊かな水と緑に恵まれた良好な環境と大都市を結ぶ交通の利便性により発展してきたまちです。

古くは旧石器時代から人々が生活を営んだことがわかっており、特に８世紀後半には、「長岡京」という当時のわが国の都が置かれた地として全国的に知られています。また、市内には恵解山古墳をはじめとした首長墓や、勝龍寺城などの城館跡、乙訓寺・長岡天満宮といった神社仏閣など、数多くの文化遺産が点在し、現代に至るまで豊かな歴史と文化を守り育んできました。

しかし、こうした遺跡は、まちの発展の一方でかつての姿が失われつつあります。本市では、これらの遺跡の調査・保護に力を入れるとともに普及・啓発に努め、地域全体で風土や文化遺産を守るまちづくりを進めています。特に平成２３年度から国史跡恵解山古墳の保存・整備に尽力し、今秋には、史跡公園として開園する予定です。

さて、本報告書は、平成２５年度に長岡京市教育委員会が実施した東神足地区・井ノ内地区・下海印寺地区における発掘調査の成果をまとめたものです。調査は長岡京の全容解明を目的として実施したものですが、あわせて東神足地区では勝龍寺城の土塁・空堀跡の構造解明、井ノ内地区では乙訓地方の首長墓系譜を考えるうえで重要な井ノ内車塚古墳の規模や形状の把握、下海印寺地区では縄文時代中・後期の伊賀寺遺跡縁辺の状況確認を行いました。

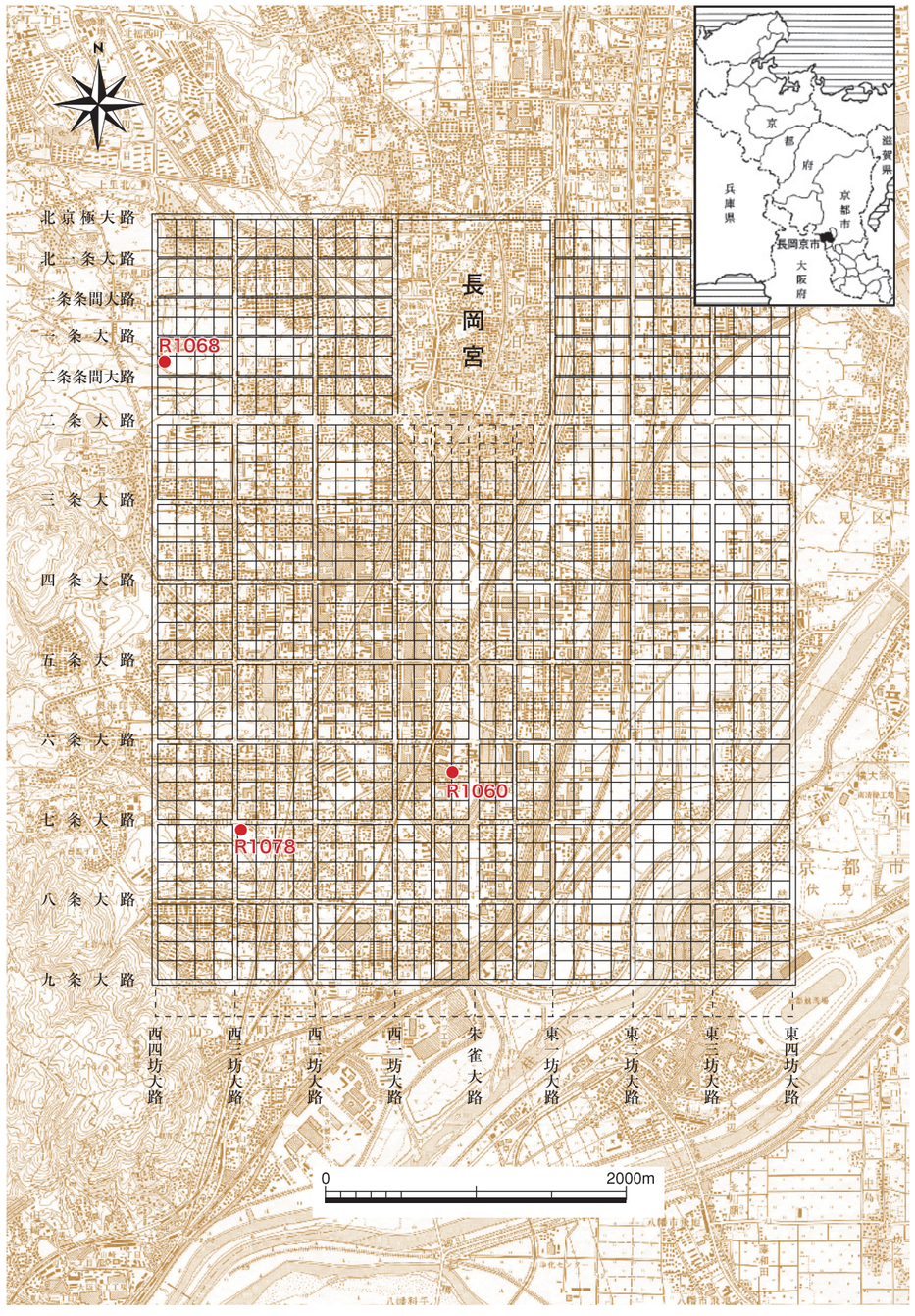
最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していただいた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

平成 26 年 ３月

長岡京市教育委員会

教育長　　山 本　和 紀



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

凡　　例

1．本書は、長岡京市教育委員会が平成 25 年度に国庫補助事業として公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査に関する概要報告である。

2．調査対象地は、第１図および付表−１に表示した。

3．長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977 年）収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。

4．長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第 38 巻第４号（1992 年）の復元案に従った。

5．本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991 年）によった。

6．本文の（注）に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985 年）に従って略記した。

7．本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数＋番号であるが、煩雑さを避けるため、調査次数を省略している。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD○○○ 01」が正式な番号である。

8．本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第Ⅵ系によっている。

9．本書の挿図の土層名で〈 〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』（1997 年版）の JIS 表記法による土色名である。

10. 本書の執筆は、各章のはじめに氏名を記し、編集は公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの山本輝雄が行った。

付表− 1　本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京第 1060 次	7ANMKI− 9	長岡京市東神足二丁目地内	2013 年６月 17 日〜2013 年８月 13 日	48㎡	勝龍寺城跡土塁 神足城跡 神足遺跡
井ノ内車塚古墳第６次 長岡京跡右京第 1068 次	7ANGKT− 7	長岡京市井ノ内向井芝４	2013 年 ８ 月７日〜2013 年 10 月２日	63㎡	井ノ内車塚古墳
長岡京跡右京第 1078 次	7ANOOD−14	長岡京市下海印寺下内田 13-1	2013 年 12 月９日〜2014 年１月 25 日	98㎡	伊賀寺遺跡

本 文 目 次

第１章　長岡京跡右京第 1060 次（7ANMKI－９地区）調査概要
1　はじめに …… 1
2　調査経過 …… 2
3　検出遺構 …… 3
4　ま と め …… 6

第２章　井ノ内車塚古墳第６次調査概要
— 長岡京跡右京第 1068 次（7ANGKT－７地区）—
1　はじめに …… 11
2　調査経過 …… 12
3　検出遺構 …… 14
4　出土遺物 …… 18
5　ま と め …… 20

第３章　長岡京跡右京第 1078 次（7ANOOD－14 地区）調査概要
1　はじめに …… 21
2　調査経過 …… 22
3　検出遺構 …… 22
4　ま と め …… 24

巻 頭 図 版

巻頭図版１　（１）勝龍寺城北東の南西部土塁・空堀残存状況（北東から）
（２）土塁構築面からの掘り込み SD02（東から）
巻頭図版２　（１）調査前墳丘の状況（北西から）
（２）２トレンチ埴輪出土状況（西から）

図 版 目 次

中世勝龍寺城（長岡京跡右京第 1060 次）調査
図版１　（１）調査区北辺調査前風景（北西から）　（２）南北土塁北崖面調査区（北西から）
図版２　（１）西・中央調査区全景（東から）　（２）西調査区東端北壁面の東西空堀堆積状況（南から）
図版３　（１）南北土塁構築以前の堀り込み SD02（東から）　（２）中央調査区中央部東西空堀堆積土層（南東から）
図版４　（１）中央調査区北端平坦面堆積層（東から）　（２）中央調査区南端東西土塁構築土層（東から）
図版５　（１）東調査区土橋構築土層（西から）　（２）調査後の土塁保護対策風景（北東から）
井ノ内車塚古墳第６次調査（長岡京跡右京第 1068 次）
図版６　（１）調査区全景（北から）　（２）調査区全景（南から）
図版７　（１）１トレンチ全景（北から）　（２）１トレンチ全景（南から）
（３）１トレンチ盛土堆積状況（南西から）
図版８　（１）２トレンチ全景（南から）　（２）２トレンチ全景（西から）
図版９　（１）造り出し又は墓道全景（南東から）　（２）造り出し又は墓道全景（東から）
（３）造り出し又は墓道全景（西から）
図版 10（１）埴輪出土状況（北から）　（２）埴輪出土状況（西から）
伊賀寺遺跡（長岡京跡右京第 1078 次）調査
図版 11（１）調査区遠景（北西から）　（２）調査区遠景（南から）
図版 12（１）飛鳥～奈良時代の遺構群全景（西から）　（２）飛鳥～奈良時代の遺構群（東から）
図版 13（１）掘立柱建物 SB03（南東から）　（２）掘立柱建物 SB04（南西から）
図版 14（１）小穴 P3 須恵器杯 B 出土状況（北から）　（２）落ち込み SX01・溝 SD05 検出状況（南東から）
図版 15（１）落ち込み SX01・溝 SD05 完掘状況（南西から）　（２）落ち込み SX01 縄文土器出土状況（北東から）

付 表 目 次

付表－１　本書報告調査地一覧表 …… iii
付表－２　報告書抄録 …… 26

挿　図　目　次

第 1 図　長岡京と調査地の位置（1/40,000）…… ii

長岡京跡右京第 1060 次調査

第 2 図　発掘調査地位置図（1/5,000）…… 1
第 3 図　中世勝龍寺城北東区画南西部付近の調査位置図（1/500）…… 2
第 4 図　北東区画西辺南北土塁北崖面土層図、西調査区平面図・土層図（1/80）…… 7・8
第 5 図　中央調査区、東調査区平面図・土層図（1/80）…… 9・10

井ノ内車塚古墳第６次調査（長岡京跡右京第 1068 次調査） 11
第 6 図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 12
第 7 図　墳丘と調査区配置図（1/400）…… 13
第 8 図　第６次調査平面図（1/100）…… 14
第 9 図　１トレンチ土層図（1/50）…… 15・16
第 10 図　２トレンチ平面図（1/50）…… 17
第 11 図　２トレンチ土層図（1/50）…… 19
第 12 図　墳丘と調査全体図（1/250）……

長岡京跡右京第 1078 次調査 21
第 13 図　発掘調査地位置図（1/5,000）…… 22
第 14 図　調査区検出遺構図・土層図（1/150）…… 23
第 15 図　掘立柱建物 SB03 実測図（1/100）…… 23
第 16 図　掘立柱建物 SB04 実測図（1/100）…… 24
第 17 図　土坑 SK02 実測図（1/10）…… 24
第 18 図　小穴状遺構 P45 実測図（1/10）…… 24
第 19 図　縄文時代中期の遺構平面図（1/100）…… 25
第 20 図　浅い落ち込み SX01 遺物出土状況（1/20）……

第１章　長岡京跡右京第1060次（7ANMKI － 9地区）調査概要

—長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡・中世勝龍寺城跡・神足城跡—

1　はじめに

1　本報告は、2013 年 6 月 17 日から 8 月 13 日まで、長岡京市東神足二丁目地内において実施した中世勝龍寺城跡（北東外郭施設の土塁・空堀・土橋）・長岡京跡・神足遺跡に関する調査概要である。

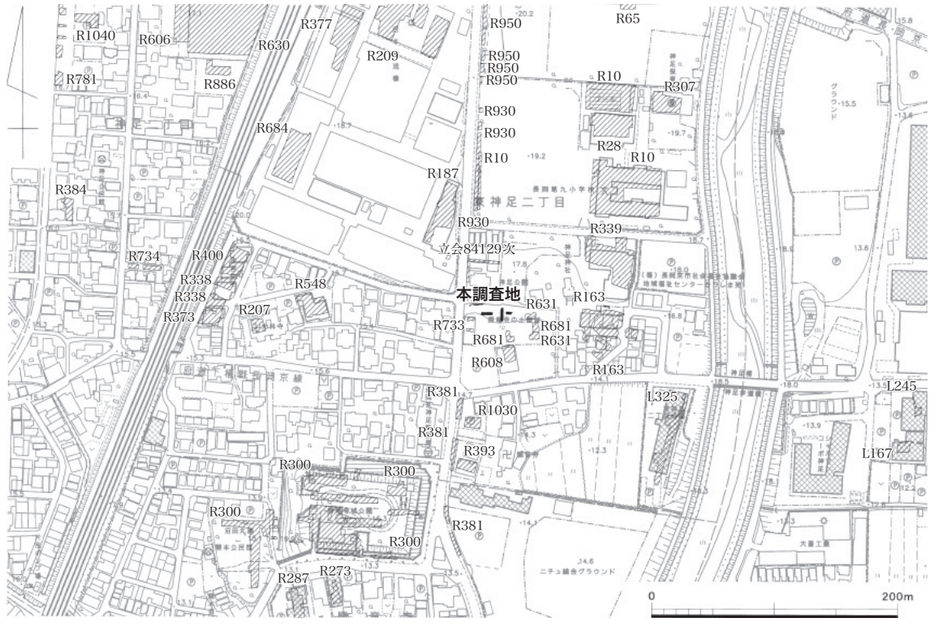
2　当調査は、神足公園整備に伴い、中世勝龍寺城跡の残存遺構を活かして整備する目的で実施したものである。調査面積は、約 48㎡であった。

3　調査地は、長岡京跡右京七条一坊二町の推定地や、旧石器～鎌倉時代の神足遺跡にも重複しているため、これらに関わる範囲確認調査としての目的も兼ねていた。

4　発掘調査は、平成 25 年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施し、現地調査は同センター山本輝雄と長岡京市教育委員会教育部生涯学習課文化財係岩﨑誠が担当した。

5　発掘調査に当たっては、地元自治会、近隣住民、神足神社、神足公園利用者に深いご理解と種々のご協力をいただいた。

6　本報告は、岩﨑が執筆し、編集は山本が行った。



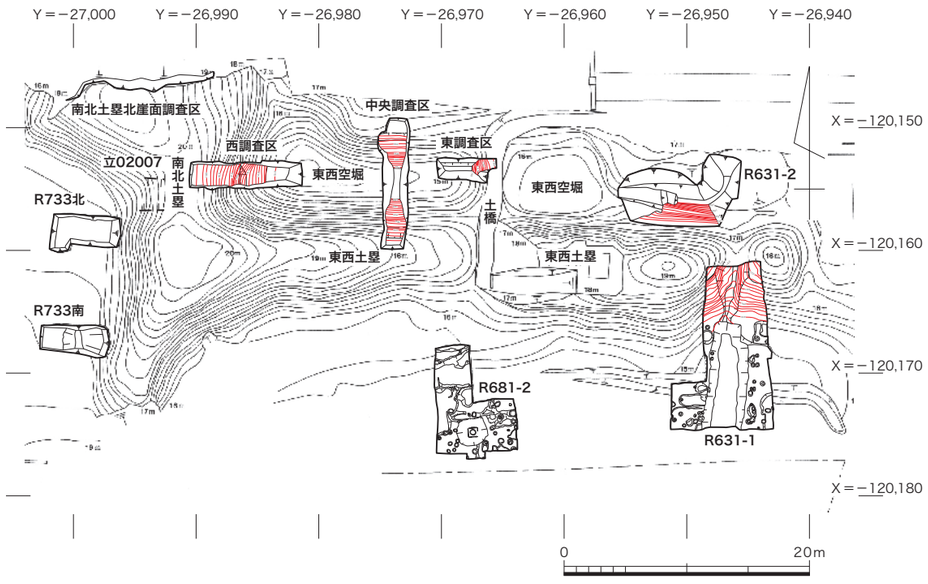
第２図　発掘調査地位置図（1/5,000）

2　調査経過

当調査地は、JR長岡京駅の南約400 mに位置する。調査地の南西約100 mの位置には、勝龍寺城主郭が所在する（第２図、図版一上）。北には隣接して神足公園があり、北東には式内社神足神社が鎮座する。南は緩やかに下る地形で、低位段丘ⅠからⅡへ移行する。調査地の現状は、密生乱立した孟宗竹林で、この竹薮内には土塁や空堀と空堀を渡る土橋が、明瞭な起伏として残っている。これらの構造物は、その配置関係から中世城館の防御機能をもつ横矢構造の施設と位置付けられ、勝龍寺城の北東外郭施設の一部と考えられている。このような残存遺構群は、細川藤孝が元亀２(1571)年に勝龍寺城を改築した時に築いたとされている(注1)。当所に残る土塁と空堀は、途切れながらも神足神社や神足公園などを囲むような配置にある。その規模は、東西約130 m、南北約80 mの長方形に近い形状である。ここでは、この区画を勝龍寺城北東区画と呼ぶ。

今回の神足公園整備範囲は、勝龍寺城北東区画の南西部に残る土塁空堀遺存地形をほぼ覆い、同区画南辺空堀を渡る土橋が、ほぼ中央に位置する。当調査は、土橋所在位置より西側に重点を置いた。調査範囲の西辺にある北東区画西辺の南北土塁北端は、神足神社への西からの進入路により削平を受け、崖面になっている。また、同南北土塁の南部には、北東区画の南辺となる東西土塁が取り付くとともに、その取り付き位置から南に南北土塁中軸線を南西方向に変えてさらに南へ伸びる。北東区画南辺となる東西土塁の北辺には東西空堀が伴う。この空堀の西端は北東区画西辺の南北土塁に沿って北に折れ曲がる。

当調査地付近は、1979年から1980年に京都考古学研究会が踏査し、精密な地形測量が行われ(2)、土塁と空堀および土橋の残存状況が実測図で具体的に示されるとともに、勝龍寺城の縄張りに関



第３図　勝龍寺城北東区画南西部付近の調査位置図（1/500）

する検討が急速に進展した。その後、細川勝龍寺城縄張り想定範囲内での調査が増え、部分的な内容が把握されてきた(3)。

今回の調査は、勝龍寺城北東区画南辺が、北接する神足公園に取り込まれて整備されるのに伴い、遺跡の保存と活用を視野に入れた整備を行う上で必要なデータを得ることを主な目的として実施した。そこで、勝龍寺城関連施設と考えられる遺構群の具体的規模や構造を明らかにするため、４か所に調査区を設定した（第３図）。その一つは、対象地西辺にある南北土塁の北端崖面で断面観察を行った。この調査区を南北土塁北崖面調査区とした（図版一下）。２か所目は、同南北土塁のほぼ中央部東斜面に調査区を設け、西調査区とした（図版二上）。３か所目は、東西空堀を横断する方向に勝龍寺城北東区画南辺の東西土塁北斜面から同区画平坦地にかけての調査区を設け、中央調査区とした（図版二上）。４か所目は、東西空堀を横断する土橋推定施設の西側面に調査区を設け、東調査区とした（図版五上）。

（1）南北土塁北崖面調査区

3　検出遺構

当調査区（第４図左）は、勝龍寺城北東区画西辺にある南北方向土塁の北端崖面であり、土塁の構造を考察する目的がある。土塁構築盛土は、土質の特徴から、黄色系と黒色系の互層からなる下層（同図土層図第12～16層）と、細分が困難な礫層からなる上層（同図第２～11層）の２層に大きく分けることが出来る。この違いは、一時期の土塁構築における時間的な差とする見方がある。また、この上層は、西調査区で検出した土塁構築以前の掘り込みSD02を埋めた上層の土質と極めて類似している（同図右西調査区土塁側面図第２・３層）ことから、構築時期の違いとも考えられる。すなわち、下層の土塁構築盛土からなる低い土塁が構築された後、何らかの都合で上層が盛土されて現在に残る規模と形状に改変されたと類推する考え方である。その根拠は、東西土塁に関係する過去の調査との比較による。構築時期は、出土遺物がないため明確でない。このような上・下層からなる土塁の残存高は、周辺部で検出した土塁構築面から約５mを測る。現状の当土塁の高さは、現存土塁頂部付近の表土の厚さが10cm以下しかないことから、本来の高さより幾分かは低くなっていると察せられる。

＜土塁構築盛土上層＞

第２～11層は、土質と土色の特徴から、当所周辺の基盤層になっているにぶい黄橙色の低位段丘礫層を掘削し、土塁として盛土した土層と考えられる。この土塁構築土は、土塁構築盛土下層の上を覆うように、東斜面を中心に、厚さ約１m盛られ、西側には厚さ約10～20cmの積み重ねが観察できた。西側の薄い積み重なりからなる土層（第８～10層）は、この南北土塁の東に平行して掘られた空堀の掘削土を、土塁構築盛土下層からなる土塁上に掻きあげ、土塁西傾斜面に掻き落とされたことに起因しているものと考えられる。

＜土塁構築盛土下層＞

黄橙色土と黒色土が互層に盛られている（第２～11層）。上層に比べて堅く締まった盛土で、

礫や小石をあまり含まない。互層に盛られた土層観察から、東側に並走する南北空堀側から築き始めていることがわかる。黒色土は、土塁構築面の表土層に酷似し、黄橙色土は、低位段丘を覆う土層に近いことや、砂礫をあまり含まないことから、この土層を当土塁の東に沿う空堀の掘削土とした場合、その空堀の掘削深度は 1.5 m前後と考えられる。構築された高さは、周辺部の土塁構築面標高から換算して、約４mと考えられる。

（2）西調査区

当調査区（第４図右）は、今回の調査範囲の西辺にある南北土塁のほぼ中央部東斜面に設定した。当調査区東端は、調査範囲内所在の東西空堀の西端である。

＜南北土塁＞

当調査区内の南北土塁は、土塁構築基盤層の段丘礫層上面から高さ約 3.5 mの盛土で構築されている。東西空堀の底から当調査区南北土塁頂部までの比高は、約 6.5 mである。斜面傾斜角は、約 45 度の急斜面である。この土塁は、当調査区から北約５m地点（北崖面調査区付近）で最も高くなっており、土塁構築基盤層上面からの高さは、約５mを測る。また、当調査区から南約５mの東西土塁が取り付く地点では、土塁構築基盤層上面からの高さは、約 4.5 mである。このように、当調査区は、残存する南北土塁の最も低まった部分の東斜面にあたる。

南北土塁構築土は、次に記す掘り込み SD02 の埋め土と考えられる下層と、その上に厚く盛られた上層に分けることが出来る。下層は、礫の少ない砂質土からなる（同図の南壁土層図第 26 ～ 29 層、同土塁側面図第４～７層）。この下層を細分層した土層のあり方から、掘り込み SD02 は、一気に埋め戻されたと考えられる。南北土塁北崖面で観察した土塁構築盛土下層の在り方とは全く異なる。上層は、その土質や土色などの特徴から、段丘礫層を掘削して厚く盛られたものと推察され、南北土塁北崖面で観察した土塁構築盛土上層の礫層に酷似している。掘り込み SD02 を埋め、南北土塁を築いた時期は、出土遺物がないため時期の確定は困難であるが、勝龍寺城史の大きな画期点と言える細川藤孝改築期が有力な候補と言える。

＜掘り込み SD02＞

当調査区では、南北土塁構築以前に段丘礫層よりも掘り下げられた掘り込み SD02 を検出した（図版三上）。この掘り込みは、深さは約２mを測る。検出範囲は掘り込みのおよそ北半分と思われるが、断面形状は逆台形と考えられる。この掘り込み SD02 は、平成 17 年度立会 02007 次調査検出の溝と繋がり、南北土塁上層構築以前の東西方向空堀と考えられる（第３図）。南北土塁頂部の低まりは、この土塁上層構築以前の空堀推定位置と重なることから、南北土塁上層構築以前の空堀を埋めたことに起因しているものと考えられる。

掘り込み SD02 を南北土塁上層構築以前の東西方向の空堀と考えると、北東区画南辺土塁北辺に今も残る空堀 SD01 の前身と考えられる。このことから、北東区画南辺土塁北辺に現存する東西空堀 SD01 は、北東区画西辺南北土塁を築く際に、深く掘り直された可能性がある。

＜空堀 SD01＞

当調査区東端部は、東西空堀の西端部である。この南北土塁東裾の空堀堆積（同図の北壁土層

図第４～７層、南壁土層図第 11 ～ 23 層、図版二下）は、堀底まで近世～近代の遺物を含み、16 世紀代の遺物は２点だけであった。空堀の深さは約 3.5 mあり、掘り込み SD02 の深さより約２m深いことから、西辺の南北土塁上層構築時に掘り足されたと考えられる。

（3）中央調査区

土橋から西辺土塁までのほぼ中央に設定した調査区で、東西土塁頂部から東西空堀を横断して北平坦面までを貫くように南北方向に設定した（第５図左）。ここでは、空堀 SD01 の幅と深さ、東西土塁構築盛土の構築状況、北平坦面の土塁構築盛土の有無などを調べる目的がある。

＜空堀 SD01＞

空堀 SD01（図版三下）は、土塁構築面になる旧表土（同図土塁側面図第８層、西壁土層図第 23 層）から段丘礫層（同図土塁側面図第９層以下、西壁土層図第 24 層以下）を掘り込んで作られている。規模は、幅約 7.5 m、深さ約 3.5 mを測る。空堀堆積層（同図西壁土層図第５～16 層）は、近世以降の堆積だけで、構築時期を示す遺物は出土しなかった。空堀の北斜面は、約 50 度の傾斜がある。空堀の底は、西調査区の空堀の底とほぼ同じ標高で、ほぼ水平に掘られている。断面形状は、逆台形で、箱堀状を呈す。

＜土塁＞

当調査区南端にある東西土塁には、厚さ約１mの土塁構築盛土が残っていた（図版四下）。土塁構築土は、土塁構築期の表土層と思われる黒色土の上に第５・６層（同図土塁側面図第２～７層、西壁土層図第 17 ～ 22 層）が確認できた。この高さは、土塁構築土がかなり崩落した状態と考えられる。土塁構築盛土からは、14 世紀の瓦器椀や羽釜などが出土した。空堀の底から土塁の残存頂部までは、比高約５mを測る。この東西土塁の北斜面は、約 50 度の傾斜がある。

＜北平坦面＞

当調査区の北端にある平坦面では、北西方向へのわずかな傾斜が観察できたが、明確な遺構は確認できず、現地表面から段丘礫層直上まで近現代の堆積で、旧表土も残っていなかった（図版四上）。

（4）東調査区

当調査区では、土橋とされている形状が、いつどのように築かれたかなどを調査主眼とした。

＜空堀 SD01＞

空堀 SD01 は、他の調査区同様に深さ約 3.5 mを測る。空堀内の堆積からは、空堀構築時期や機能していた時期を示す遺物は出土しなかった。

＜土橋＞

東西空堀を掘り抜いた後、空堀の底から盛土して（第５図右調査区土橋面図第７～ 26 層）、約３mの高さに構築している（図版五上）。構築土は、空堀堆積土と異なり、堅く締まっている。構築時期は、土橋構築土が近世以後の堆積と異なり、東西土塁・空堀構築と一連で築かれたと解せる。長岡京跡右京第 681 次調査２トレンチでは、この土橋で空堀を渡り、東西土塁を南にぬけたところの正面で、井戸や根石を持つ門構造と思われる柱穴が検出されており、興味深い。

4　まとめ

当調査では、当所に残る土塁・空堀・土橋の構造や規模などを一部ではあるが明らかにすることが出来た。以下に、土塁・空堀・土橋に関する周辺部の調査成果との関連をまとめておきたい。

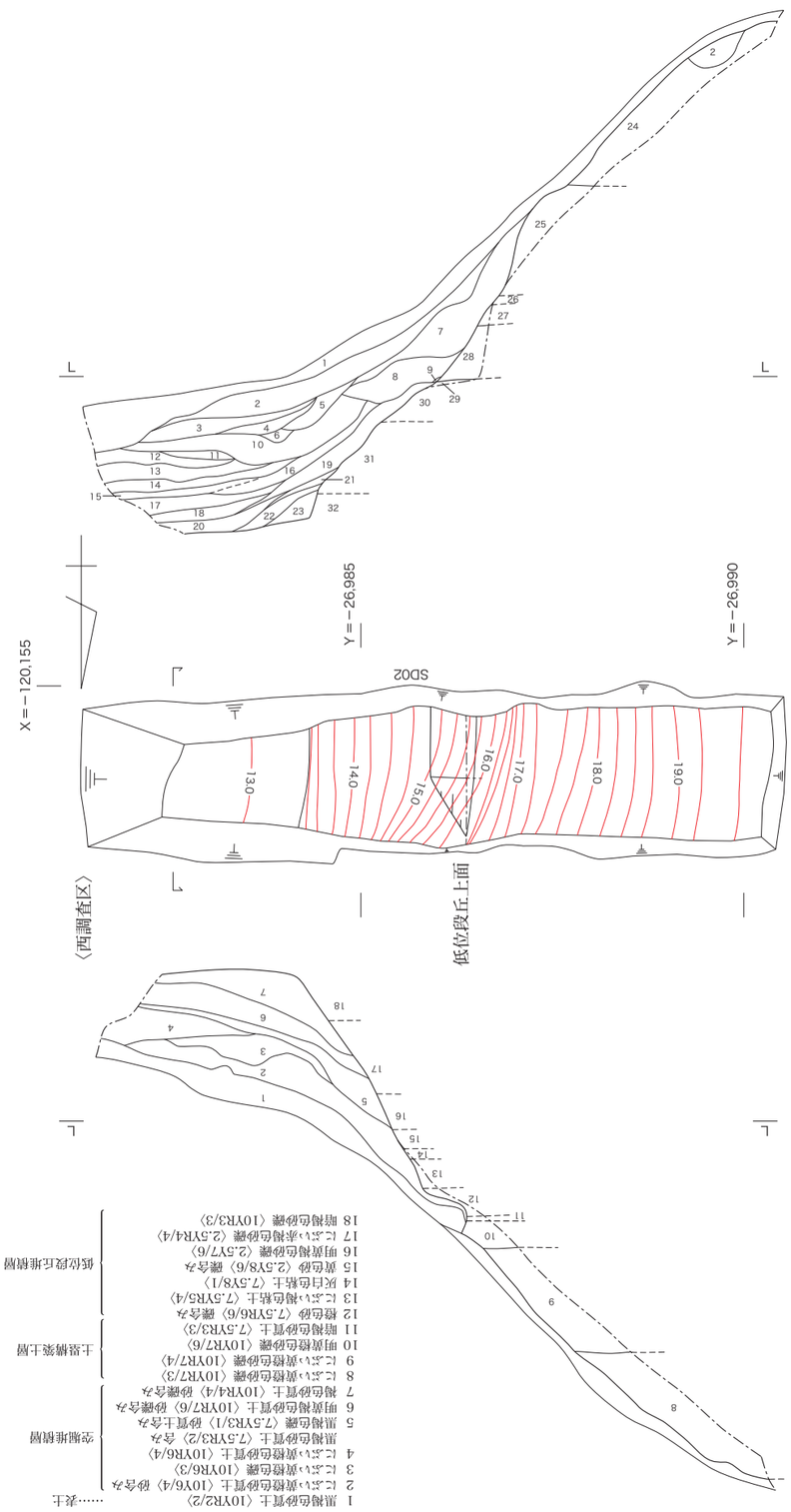
まず、土塁について比較検討する。当調査の南北土塁北端崖面の調査では、この土塁構築に２時期ある可能性を知り得た。その下層は、長岡京跡右京第 681 次調査[4]１トレンチの東西土塁上層に類似する。上層は、長岡京跡右京第 163 次調査[5]東西土塁構築土と類似する。また中央調査区南端の北東区画南辺土塁構築土は、長岡京跡右京第 681 次調査１トレンチの東西土塁下層の下位堆積部分に類似する。これらの過去の調査との比較から、長岡京跡右京第 681 次調査１トレンチ付近から当調査中央調査区付近、言い換えれば、北東区画南辺土塁南西部は構築時期が古く、長岡京跡右京第 163 次調査付近の北東区画南辺土塁東半部は新しい段階の構築である可能性がある。古い土塁構築期は、西辺の南北土塁下層構築期に相当し、西調査区検出の掘り込み SD02 や長岡京跡右京第 681 次調査１トレンチから同 631 次調査[6]１トレンチにかけて検出された空堀 SD01 と同時期である可能性がある。長岡京跡右京第 733 次調査[7]で検出された南北土塁西裾の溝も同時期の可能性が考えられる。南北土塁に東西土塁が取り付くところ以南も、長岡京跡右京第 631･681 次調査１トレンチ空堀の方向に近いことから、古い構築である可能性がある。

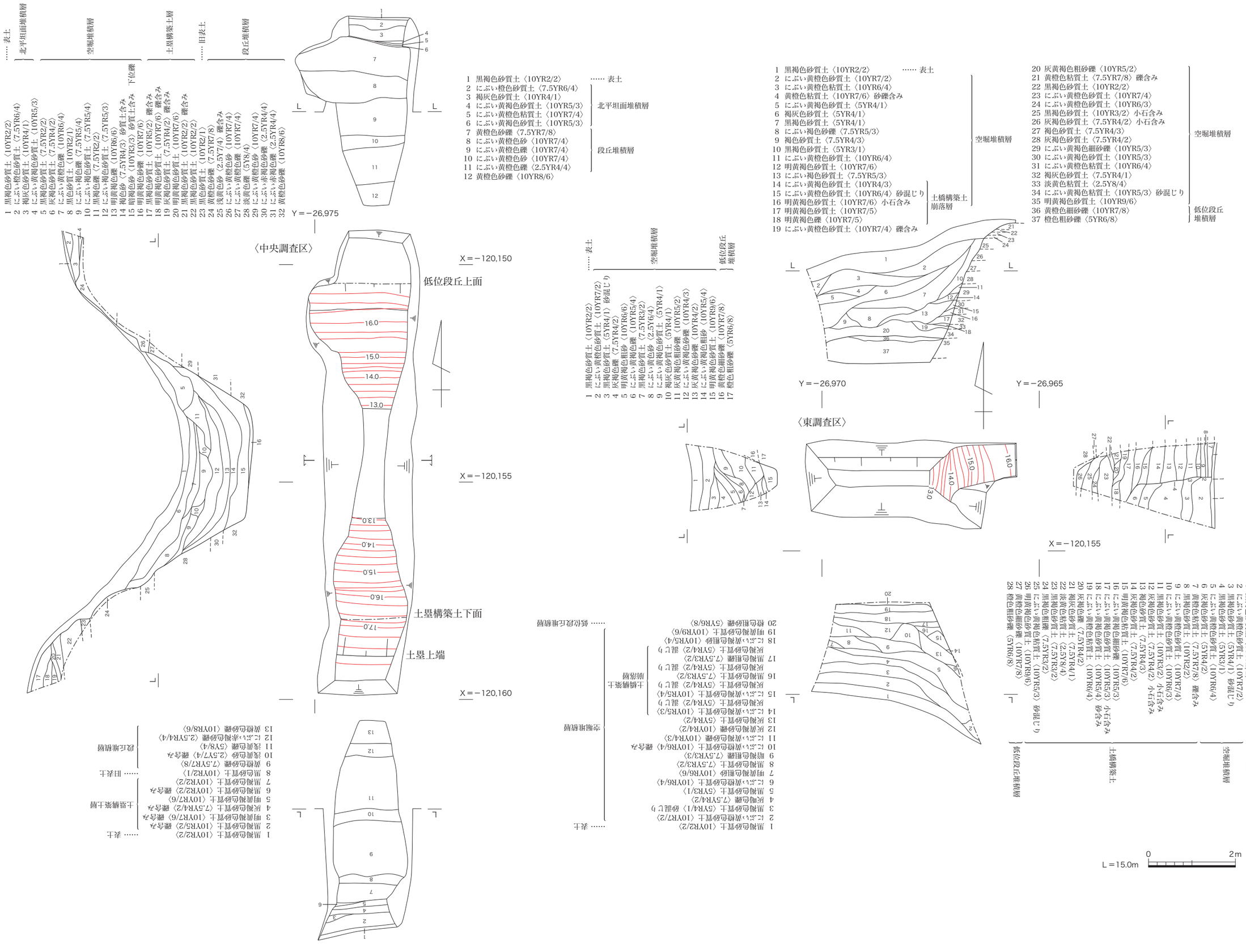
次に空堀について比較検討する。北東区画南辺土塁の北辺に平行する空堀 SD01 は、深さ３ｍを超える。これに比して、土塁構築土上層以前の掘り込み SD02 は、深さ約 1.5 ｍと浅い。東西空堀 SD01 が北東区画西辺土塁に突き当たり、南北土塁東裾に沿って北に折れ曲がっていると考えられるが、遺存地形では、この折れ曲がり以北が浅くなっており、掘り込み SD02 に類似する規模であった可能性がある。西調査区で検出した掘り込み SD02 は、平成 14 年度立会 02007 次調査検出溝につながるとすれば、南北土塁下層構築層との関係は明らかでないが、上層を築く以前に掘られた東西空堀である可能性が高い。本来この空堀が、現存する東西空堀と重なって東に延びていたと思われ、南北土塁上層構築時期に南北土塁以東をさらに深く掘り下げ、北東区画南辺東部へも延長した可能性が考えられる。

今回の調査では、各遺存遺構の規模や構築手法の一部が明らかにできたほか、当調査対象地に残る土塁と空堀の構築期が、２時期に分けられる可能性を指摘した。この２期が、神足城期と細川勝龍寺城期とに比定できるかどうか、今後の最も大きな課題と言えよう。

注１）木下　良「西岡地方における城館と防御集落」『京都社会史研究』法律文化社　1971 年
２）京都の文化遺産を守る懇談会『勝竜寺城跡 京文懇だより』No.11　1984 年３月 20 日
３）小田桐　淳「平成 14 年度立会調査」『長岡京市埋文センター年報』平成 14 年度　2004 年
４）原　秀樹「長岡京跡右京第 681 次調査概要」『長岡京市報告書』第 42 冊　2001 年
５）岩﨑　誠「長岡京跡右京第 163 次調査概要」『長岡京市報告書』第 15・17 冊　1985・1986 年
６）原　秀樹「長岡京跡右京第 631 次調査概要」『長岡京市報告書』第 41 冊　2000 年
７）木村泰彦「長岡京跡右京第 733 次調査概要」『長岡京市報告書』第 45 冊　2003 年

第４図　北東区画西辺南北土塁北崖面土層図、西調査区平面図・土層図（1/80）





第５図　中央調査区、東調査区平面図・土層図（1/80）

第２章　井ノ内車塚古墳第６次調査概要

―長岡京跡右京第 1068 次調査（7ANGKT－７地区）―

１　はじめに

1　本報告は、2013 年８月９日から 10 月２日まで、長岡京市井ノ内向井芝４において実施した井ノ内車塚古墳第６次調査（長岡京跡右京第 1068 次調査）に関するものである。

2　調査は、井ノ内車塚古墳の墳形や規模などを確認する目的で実施したもので、調査面積は 63㎡であった。

3　調査地は、長岡京跡右京二条四坊十五町にもあたるため、長岡京に関わる遺構、遺物の確認も合わせて行った。

4　発掘調査は、平成 25 年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地調査は原秀樹が担当し、山本輝雄が補佐した。

5　発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解とご協力を賜った。

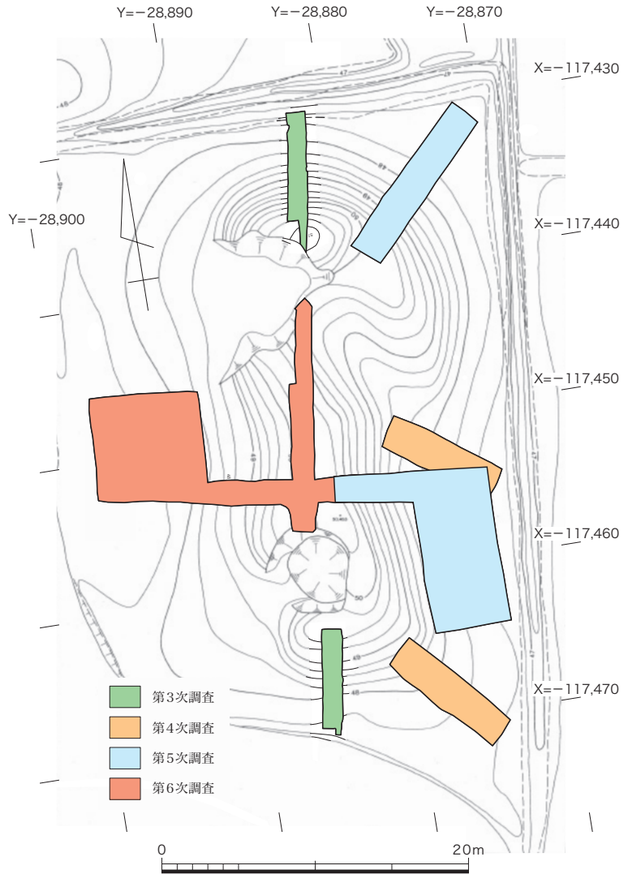
6　本報告の編集と執筆は、山本が行った。

第６図　発掘調査地位置図（1/5,000）

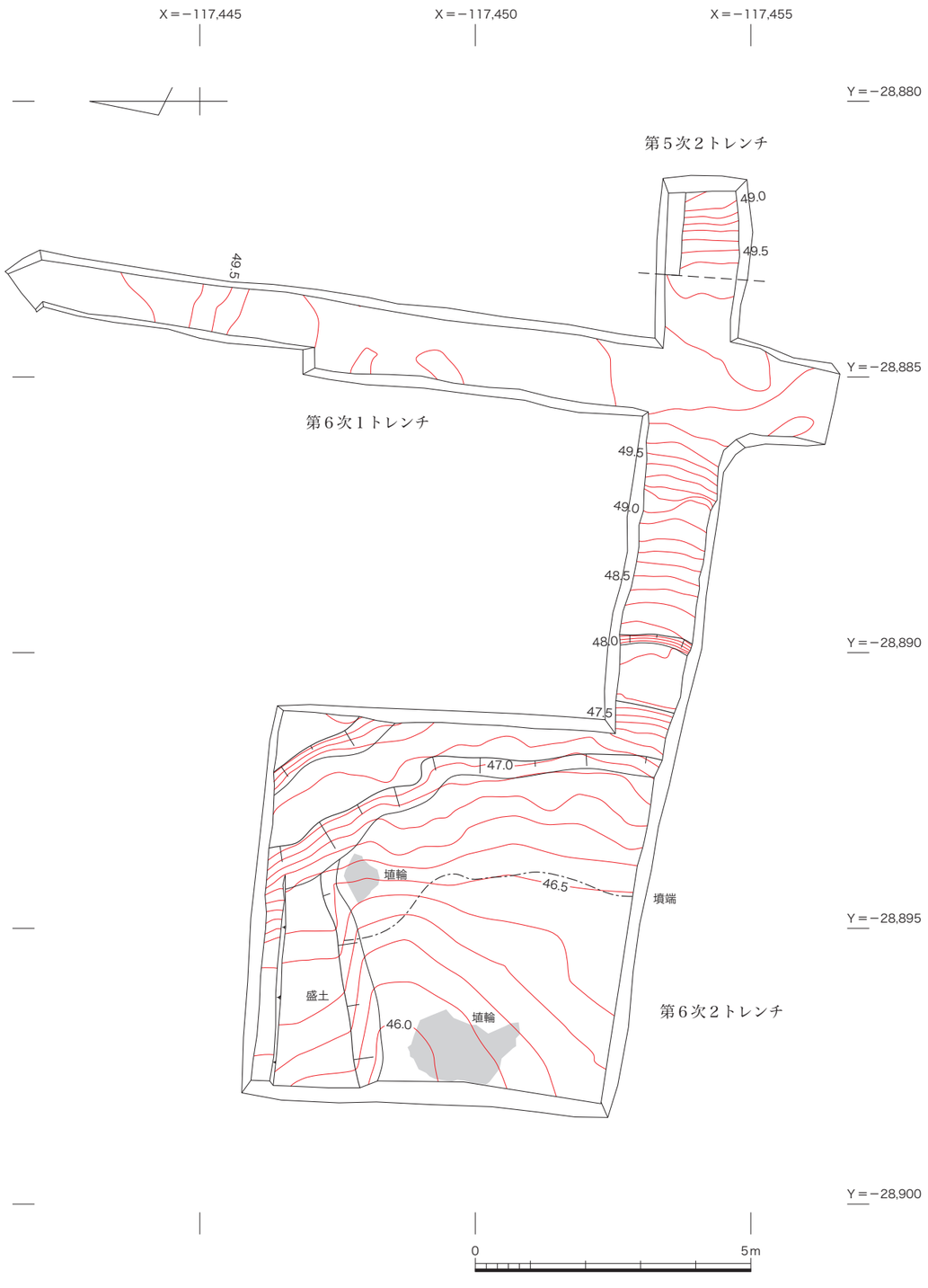
2　調査経過

井ノ内車塚古墳は、長岡京市の北部地域にあたる京都府長岡京市井ノ内向井芝４に所在する前方部を南東に向けた前方後円墳である。古墳は、西から東に向かって傾斜する標高 48 m前後の低位段丘Ⅰ上に築造されており、付近には井ノ内稲荷塚古墳や芝１号墳などの首長墳をはじめ、井ノ内古墳群や芝古墳群などといった群集墳が分布している。さらに、古墳時代後期を中心とする竪穴建物や掘立柱建物など集落に関係する遺構が確認されている上里遺跡や井ノ内遺跡も付近に所在している。

井ノ内車塚古墳に関しては、江戸時代や明治年間に作られた絵図や地籍図、それに地誌などに「車塚」という名称が記されており、地元では古くから塚＝古墳として認識されていたようである。古墳としての考古学的な認識は、1967（昭和 42）年に京都府教育委員会が墳丘の測量調査（第１次調査[注1]）を行ったことが契機となり、墳形や規模など古墳の概要が測量図とともに報告書や京都府遺跡地図に掲載され、周知の遺跡として広く世間に認知されるようになった。それから四半世紀を経過した 1997（平成９）年に大阪大学文学部考古学研究室が改めて墳丘の測量調査（第２次調査[2]）を行い、さらに 1999（平成 11）年に長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが大阪大学大学院文学研究科考古学研究室の協力を得て実施した第３次調査[3]により初めて考古的なメスが入れられたのである。その後、2011（平成 23）年からは古墳を後世に保存していくための基礎的な情報を得るための範囲確認調査として第４次調査[4]、2012（平成 24）年の第５次調査[5]を実施し、墳丘の規模や形態を復元する上での貴重な情報が得られるとともに、埴輪をはじめ土師器、須恵器、韓式系土器などの遺



第７図　墳丘と調査区配置図（1/400）



第８図　第６次調査平面図（1/100）

物がまとまって出土するなどの成果があった。

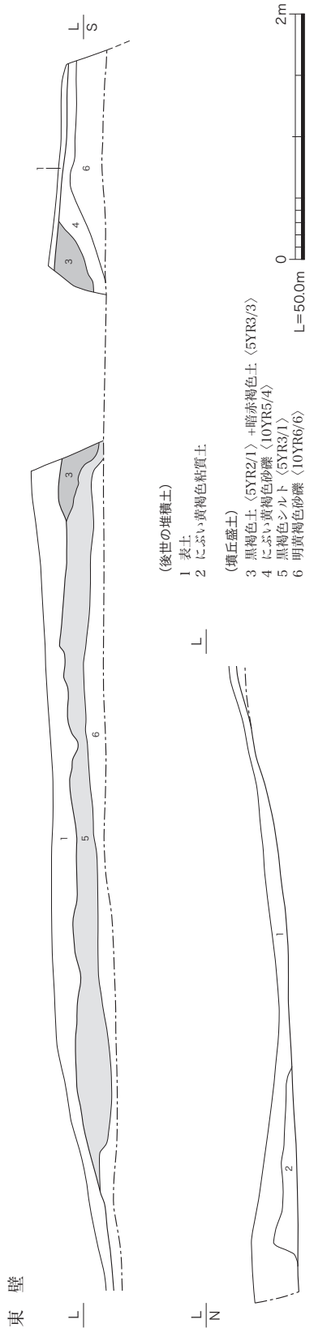
今回の第６次調査は、これまでの調査成果を踏まえ、引き続き基礎的な情報を得る目的で、墳頂部と西側くびれ部の２箇所に調査区を設定して行ったものである。調査にあたっては、まず８月９日より調査対象地に生い茂っていた孟宗竹や樹木を伐採し、それらを搬出することから開始した。そして、８月 19 日より重機で竹と樹木などの抜根作業を行った後、人力で掘り下げを行って調査を進めた。調査の結果、１トレンチでは墳頂部における盛土の構築状況を確認し、また２トレンチでは西側くびれ部とその裾部に樹立されたと考えられる埴輪片がまとまって出土した他、後円部に盛土で付設された造り出しの可能性がある高まりを検出するなど、予期せぬ大きな成果を得ることができた。そして、遺構の実測作業と写真撮影を行った後の９月 30 日から埋め戻しを行い、10 月２日に現地での調査を終了した。

なお、調査期間中の８月 20 日に文化庁文化審議会文化財分科会の寺沢知子委員の視察を受け、種々の指導を受けた。また、９月 20 日には、土地所有者や近隣の文化財担当者を主体とした関係者説明会を開催した。

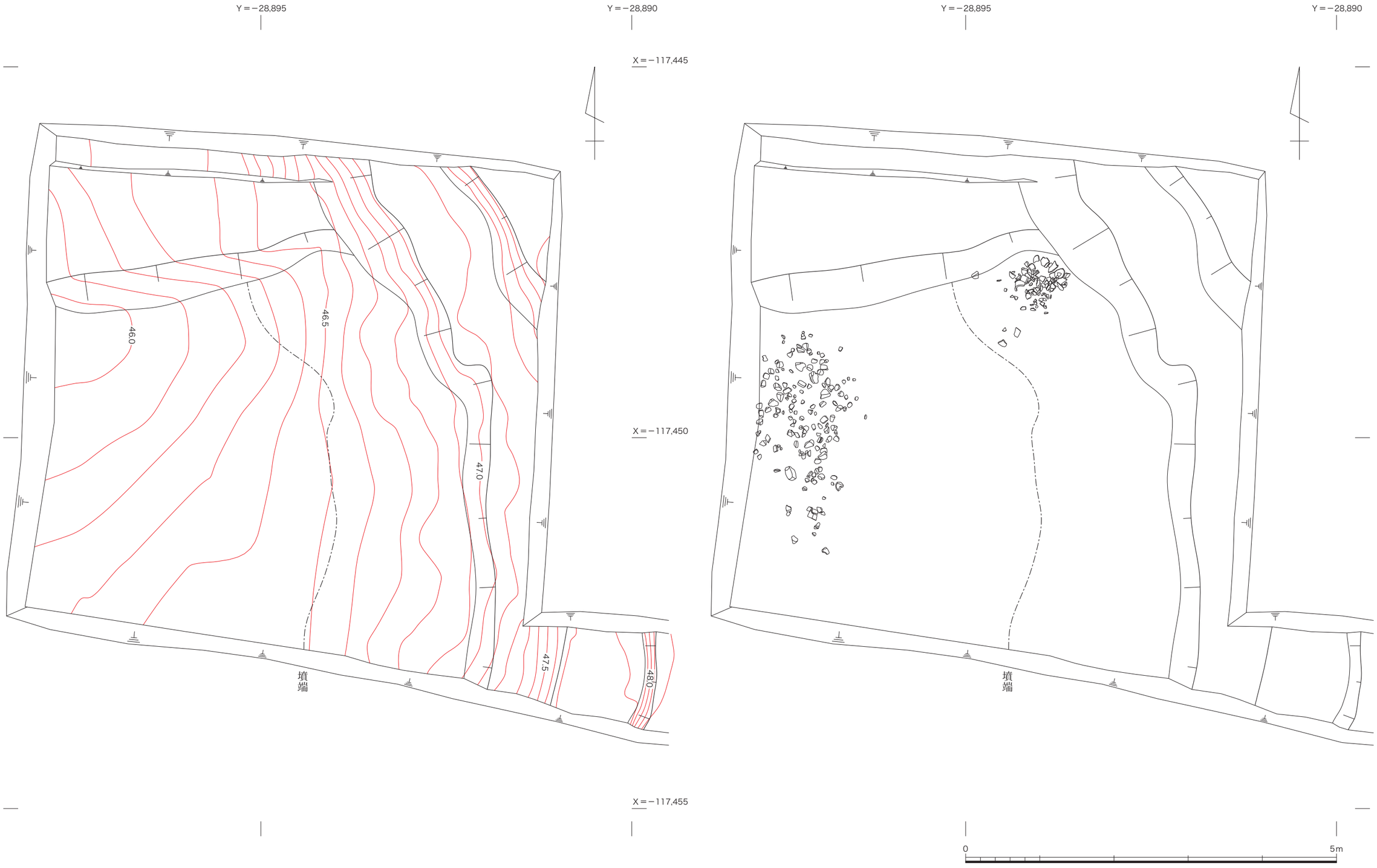
3　検出遺構

１トレンチ　後円部から前方部にかけての墳頂部に設定した調査区で、埋葬施設の痕跡や墳丘の盛土の堆積状況などの確認を目的とした。調査区は、長さ（南北）約 15 m、幅（東西）が１～ 1.5 mの規模で、調査区心の国土座標値はＸ＝−117,450、Ｙ＝−28,884 である。

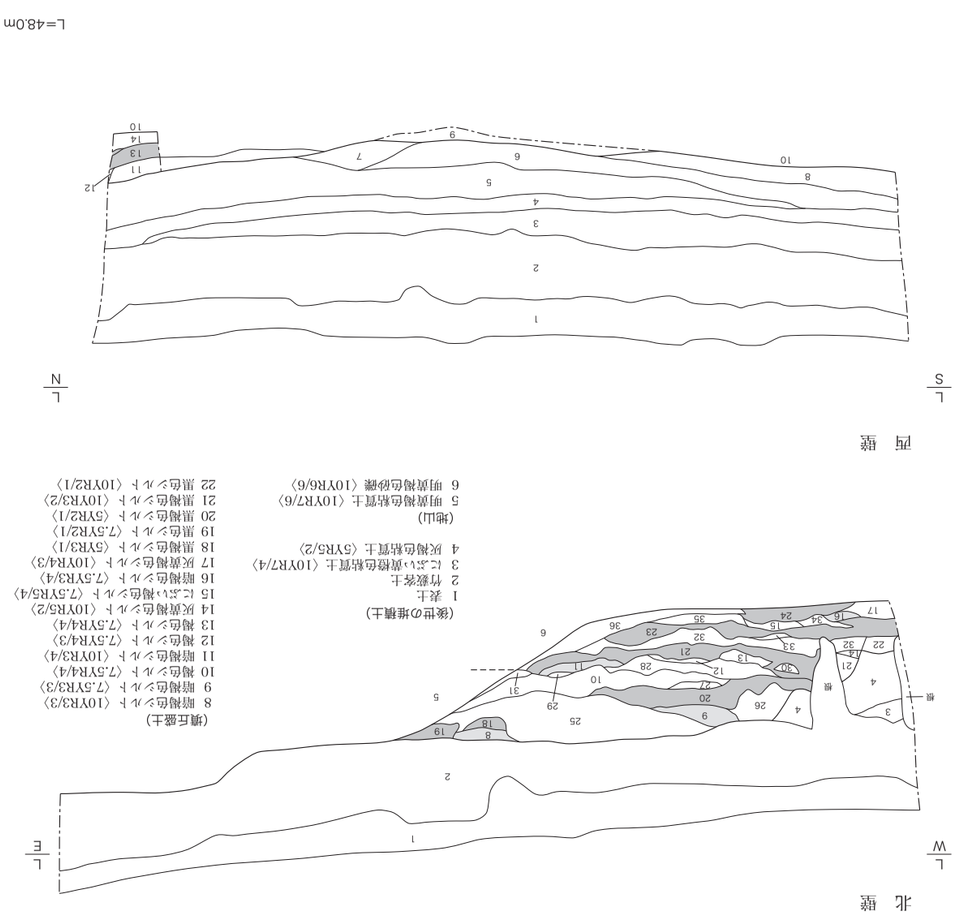
厚さ 0.5 ～ 20㎝程度の表土層を除去すると、竹薮の客土の堆積は認められず、すぐ墳丘の盛土面であることを確認した。墳丘に使用された盛土は、黒褐色系のシルト層や黄褐色系の砂礫層で構成されており、細かい単位ではなく、比較的大きな単位で積み上げたものである。トレンチの範囲では、埋葬施設に関係すると見られる土質の相違を認めることはできず、出土した遺物も皆無であった。ただし、トレンチ付近の墳丘表面において須恵



第９図　１トレンチ土層図（1/50）



第 10 図　2 トレンチ平面図（1/50）



第 11 図　２トレンチ土層図（1/50）

器の杯蓋を１点採集している。

２トレンチ　墳丘西側のくびれ部を確認する目的で設定した調査区である。おおむね７m四方の正方形調査区と、その南東隅部から東に向かって幅２m、長さ約８mの細長い調査区を付加したもので、先端は１トレンチと直交して第５次調査の２トレンチに接続している。調査区心の国土座標値は、X＝−117,450、Y＝−28,894 である。

まず、このトレンチの層序を西壁でみると、上から表土（第１層）、竹薮の客土（第２層）、にぶい黄褐色粘質土（第３層）、にぶい黄橙色粘質土（第４層）、灰褐色粘質土（第５層）、暗褐色粘質土（第６層）、灰黄褐色粘質土（第７層）、褐灰色粘質土（第８層）の順で堆積しており、その下が灰褐色粘質土（第９層）および明黄褐色砂礫（第 10 層）の地山面であった。にぶい黄褐色粘質土（第３層）は、墳丘の東側においても類似する土層が認められており、埴輪片とともに土師器や瓦器など中世の遺物を包含していたが、今回の調査では出土していない。第５〜７層には、大量の埴輪片をはじめ、緑釉陶器や白磁など平安時代と考えられる土器片が混在した状態で出土している。

このトレンチでは、当初に予想したとおり墳丘西側のくびれ部を確認することができた。くびれ部は、地山を削り込んで形成されており、墳端での標高は 46.5 m前後で、墳丘東側の墳端高と大差はなかった。さらに、トレンチ北部の後円部において、盛土で構成される高まりを確認することができた。この高まりは、後円部から直交するよう西側に向かって延びており、全容は不明であるが、南北が 1.8 m以上、東西に 3.8 m以上、高さは 1.05 m程度の規模がある。盛土は、暗褐色系や黒褐色系、黄色系などのシルト層で構成され、それらの土層が厚さ 10 〜 20cm 程度の小単位で交互に積み上げられていることを、トレンチ北辺を断ち割ることによって確認することができた。この盛土による構築物は、後円部に付設された造り出し、あるいは墓道などの施設

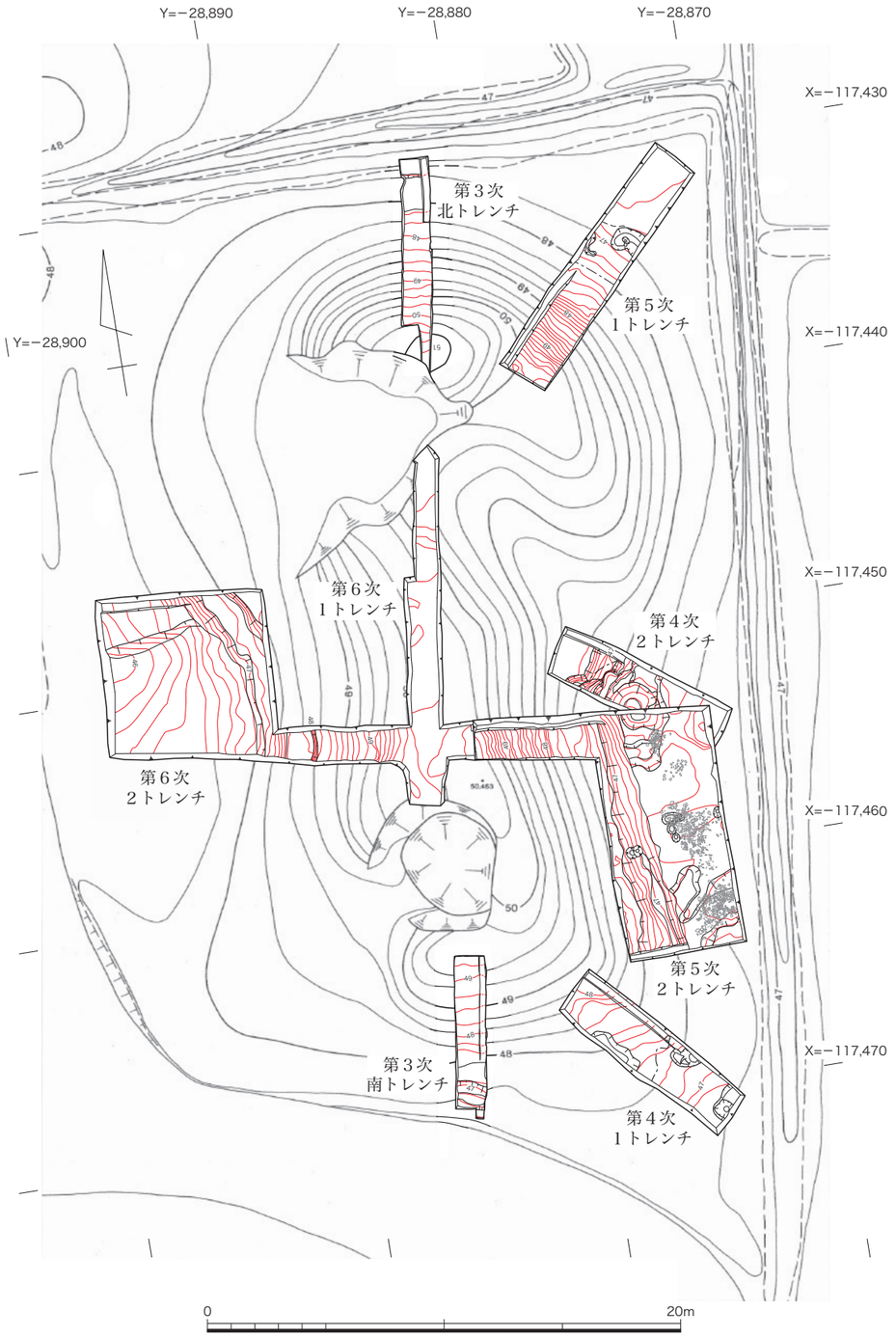
4　出土遺物

が考えられるが、翌年予定の調査を待って判断したい。

今回の第６次調査では、埴輪、土師器、須恵器、緑釉陶器、白磁、陶器、瓦、それに陶棺など各時代、各種類の遺物が整理箱に 22 箱出土している。その大半を占めているのは、２トレンチから出土した埴輪類であり、他の遺物の出土量はそれほど多くない。遺物の整理が完了していないため、詳細は本報告で詳述したいが、ここでは主な遺物の概要を述べておく。

まず埴輪は、これまでに確認されている普通円筒、朝顔形円筒、石見型、家形の他に、蓋形、盾形、巫女形、馬形、犬形など多彩な形象埴輪が今回確認された。

普通円筒埴輪は、３条突帯４段構成に復元することができるもので、外面の調整は基本的にタテハケないしナナメハケを施し、底部調整が認められる。透孔は円形で、２段目と３段目に交互の位置に配している。焼成は、黒斑を有するものがないため、窖窯によって硬質に焼成されたものが主体であるが、軟質に焼成されたもの、完全に須恵質に焼成されたものも存在する。石見型埴輪は、形象部に円孔を複数穿っているが、文様はほとんど施されていない。円筒部の上端は、



第 12 図　墳丘と調査全体図（1/250）

先細りして終わる通有の形態ではなく、粘土を逆ハ字形に形象部裏面に貼り付ける特徴が認められる。

形象埴輪は、いずれも全形をうかがい知れるものはなかった。巫女形埴輪は、小型品のようで、袈裟状衣を表現している。馬形埴輪は、馬具を装着した飾り馬で、尻懸や鐙などを表現している。犬形埴輪は、胴部、脚部、尻尾、耳などが確認できる。

須恵器には、杯蓋や甕などがあり、杯蓋は陶邑窯の TK10 型式に比定できる。

緑釉陶器は、椀や皿などの器種があり、須恵質のものと軟質のものがある。白磁は底部の少片である。

陶棺は、表面採集されたもので、須恵質四注式陶棺の棺身の底部片である。側面には横方向に粗いハケメが施されており、底部外面には同心円文のタタキ痕をわずかにとどめる。須恵質に焼成されており、色調は暗灰色を呈している。

5　ま と め

今回の第６次調査の成果は多岐にわたるが、以下簡単にまとめると次のようになる。

①墳丘西側のくびれ部裾のおおよその位置を確認することができ、墳形を復元する上での貴重な定点が得られた。

②くびれ部に近接する後円部には、盛土で構築された高まりを付設していることが判明し、造り出しあるいは墓道が存在した可能性が濃厚になった。

③墳丘の裾部において大量の埴輪片が出土したことで、墳丘の東側のみならず西側においても埴輪を樹立していたことが明らかになった。埴輪には、これまで知られていなかった蓋形、馬形、犬形、巫女形など多彩な形象埴輪があり、これまで不明であった埴輪が破壊されて埋没した時期が平安時代である可能性が考えらるようになった。

注１）堤圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺分布遺跡調査概要」『京都府概報』 1968 年
２）都出比呂志編『古墳時代首長墓変動パターンの比較研究』 1999 年
３）清家章「井ノ内車塚古墳第３次調査概要」『長岡京市報告書』第 41 冊　2000 年
４）山本輝雄「井ノ内車塚古墳第４次調査概要」『長岡京市報告書』第 61 冊　2012 年
５）山本輝雄「井ノ内車塚古墳第５次調査概要」『長岡京市報告書』第 64 冊　2013 年

第３章　長岡京跡右京第1078次（7ANOOD － 14地区）調査概要

―長岡京跡右京八条三坊十六町、伊賀寺遺跡―

1　はじめに

1　本報告は、2013 年 12 月 9 日から 2014 年 1 月 25 日まで、長岡京市下海印寺下内田 13-1 において実施した伊賀寺遺跡・長岡京跡に関する調査概要である。

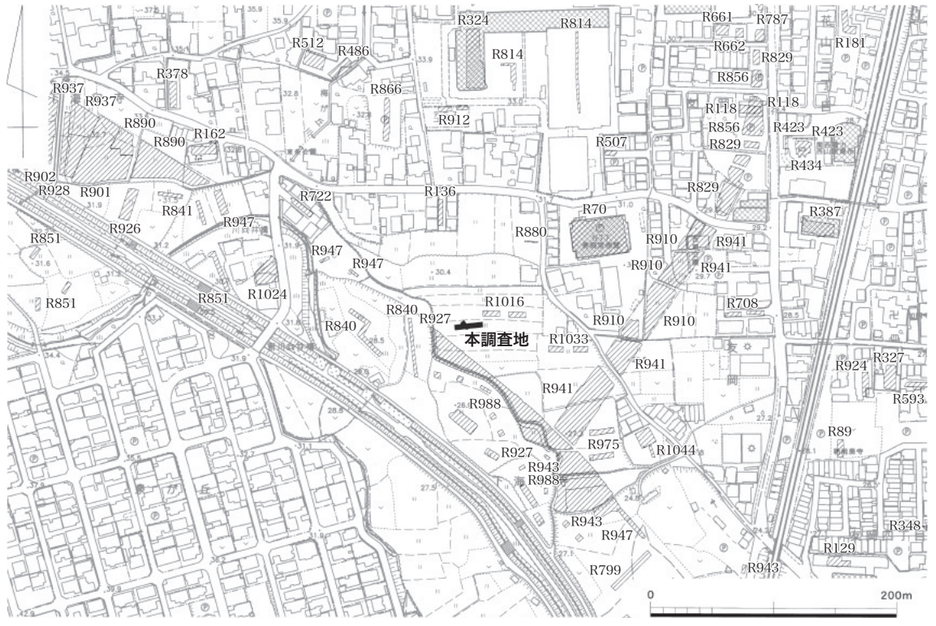
2　当調査は、伊賀寺縄文遺跡の範囲及び土地利用状況を掌握し、遺跡保護に資する資料を得るために実施した。調査面積は、約 98㎡であった。

3　調査地は、長岡京跡右京八条三坊十六町の推定地や、縄文時代をはじめ古墳時代以後の伊賀寺遺跡にも重複しているため、これらに関わる範囲確認調査としての目的も兼ねていた。

4　発掘調査は、平成 25 年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施し、現地調査は同センター山本輝雄と長岡京市教育委員会教育部生涯学習課文化財係岩崎誠が担当した。

5　発掘調査に当たっては、土地所有者をはじめ、地元自治会、農家組合、近隣土地所有者や住民に深いご理解と種々のご協力をいただいた。

6　本報告は、岩崎が執筆し、編集は山本が行った。



第 13 図　発掘調査地位置図（1/5,000）

2　調査経過

この調査は、伊賀寺縄文時代集落遺跡の範囲確認と、当調査地点の土地利用状況を把握し、遺跡保存に必要なデータを得ることを目的としている。また、長岡京跡に関する遺構の有無や、古墳時代から奈良時代にかけての伊賀寺遺跡の様相を調査することも、重要な目的の一つである。

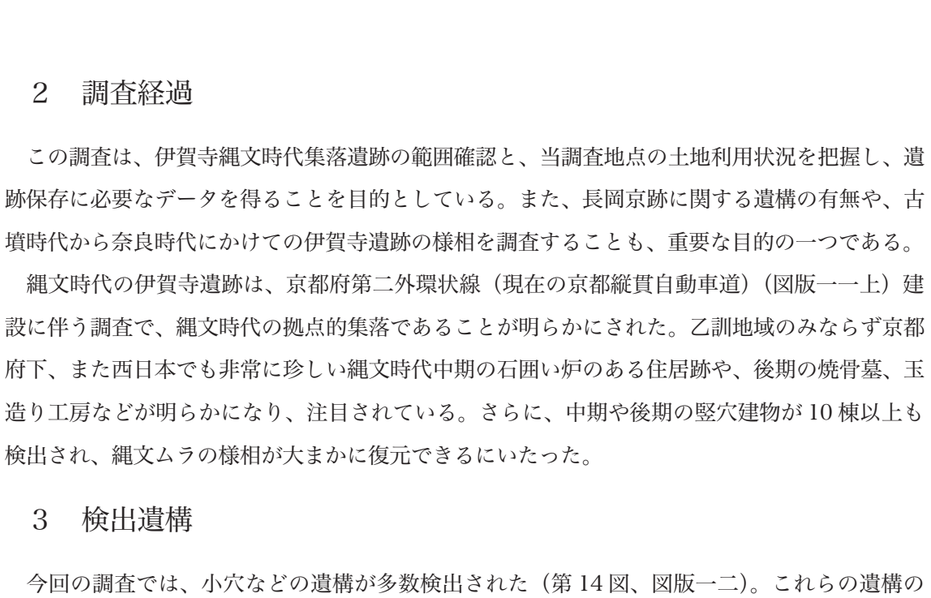
縄文時代の伊賀寺遺跡は、京都府第二外環状線（現在の京都縦貫自動車道）（図版一一上）建設に伴う調査で、縄文時代の拠点的集落であることが明らかにされた。乙訓地域のみならず京都府下、また西日本でも非常に珍しい縄文時代中期の石囲い炉のある住居跡や、後期の焼骨墓、玉造り工房などが明らかになり、注目されている。さらに、中期や後期の竪穴建物が 10 棟以上も検出され、縄文ムラの様相が大まかに復元できるにいたった。

3　検出遺構

今回の調査では、小穴などの遺構が多数検出された（第 14 図、図版一二）。これらの遺構の埋土は、黒色、黒褐色、褐色に分けることができた。黒色土を埋土とする遺構からは、飛鳥時代や奈良時代の土器片が出土し、黒褐色の埋土を持つ遺構からは、縄文土器が出土し、土色の違いは、時期差と考えられる。これらの遺構群を、時代ごとに概観する。

＜飛鳥～奈良時代の遺構＞

一辺が 0.6 ～ 1 m の方形または長方形の小穴などがある。これらの小穴群は、その配列から、



1　黄灰色粘質土〈2.5Y6/1〉耕土…第１層
2　にぶい黄橙色粘質土〈10YR7/4〉…第２層
3　黒褐色粘質土〈5YR2/1〉
4　黒褐色粘質土〈5YR2/1〉
5　褐灰色粘質土〈10YR4/1〉砂礫多く含む
6　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉砂礫多く含む
7　灰褐色粘質土〈7.5YR4/2〉
8　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉砂礫多く含む…第３層
9　にぶい赤褐色粘質土〈5YR4/4〉

第 14 図　調査区検出遺構図・土層図（1/150）

建物としてまとまるものがある。

掘立柱建物 SB03（第 15 図、図版一三上）は、北西−南東方向に棟をもつ建物である。建物の規模は、梁行２間（約 3.9 m）、桁行３間（約 6.3 m）に復元できる。柱間は、梁行１間が約 1.95 m等間、桁行１件が約 2.1 m等間に配置されている。棟方向は、N−40°−W を指す。北西隅の柱穴（SB03P7）から飛鳥時代須恵器杯Ｇが出土した。各柱穴の柱根は明らかにできなかった。掘形が、基本的に隅円方形であるが、南東方向へ張り出した形状をなすものがあることから、解体時に柱を抜き取っているものと思われる。

掘立柱建物 SB04（第 16 図、図版一三下）は、掘立柱建物 SB03 と同じ方向に棟をもつ同規模の建物と考えられる。梁行２間（3.9 m）、桁行１間（約 2.1 m）を検出した。梁行の柱間は、約 1.95 m等間である。

小穴 P1 は、一辺約 0.7 mの隅丸方形を呈する掘形で、深さ約 0.15 mを測る。土師器杯皿類の口縁部細片が出土した。奈良時代の所産と思われる。埋土は、掘立柱建物 SB03・04 の柱穴埋土１に類似する。

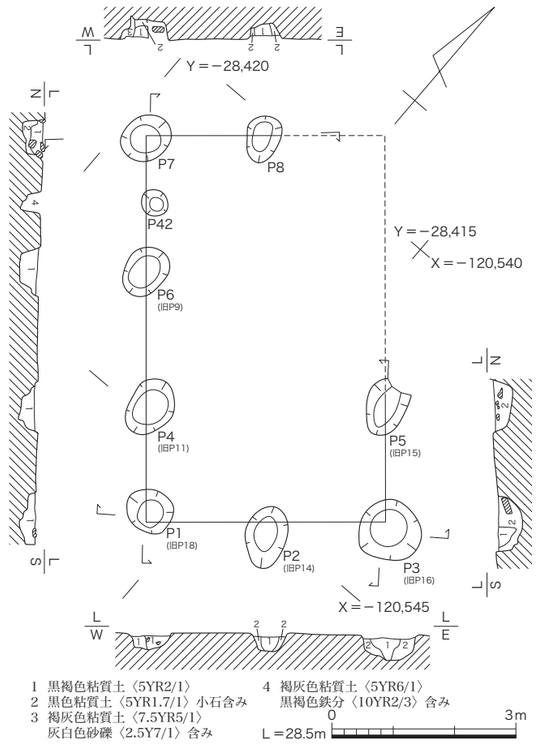
小穴 P3（図版一四上）は、１辺約 0.5m の隅円方形で、深さ約 0.2 mを測る。埋土に 20cm 大の礫を含む。検出面直下から、奈良時代の須恵器杯Ｂが出土した。埋土は、出土遺物がほとんどない小穴群に類似する。

＜縄文時代後期の遺構＞

小穴状の遺構 P23・P33・P45・P46 や円形・楕円形の土坑 SK02・06・07 がある。

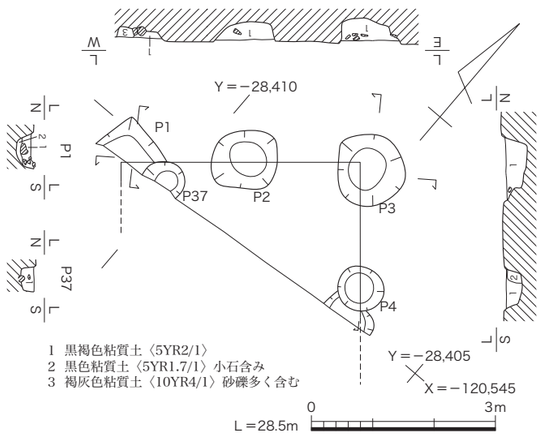
土坑 SK02（第 17 図）は、長径約 1.5 m、短径約 1.2 mの楕円形を呈する。深さは約 0.26 mを測る。

土坑 SK06 は、長径約 1.1 m、短径



1　黒褐色粘質土〈5YR2/1〉
2　黒色粘質土〈5YR1.7/1〉小石含み
3　褐灰色粘質土〈7.5YR5/1〉
　灰白色砂礫〈2.5Y7/1〉含み
4　褐灰色粘質土〈5YR6/1〉
　黒褐色鉄分〈10YR2/3〉含み

第 15 図　掘立柱建物 SB03 実測図（1/100）



1　黒褐色粘質土〈5YR2/1〉
2　黒色粘質土〈5YR1.7/1〉小石含み
3　褐灰色粘質土〈10YR4/1〉砂礫多く含む

第 16 図　掘立柱建物 SB04 実測図（1/100）

約 0.7 mの楕円形で、深さ約 0.4 mを測る。南西部は、掘立柱建物 SB04P3 に削られている。

土坑 SK07 は、長径約 1.2 m、短径約 0.9 mの隅円方形に近い楕円形を呈する。縄文後期の土器が出土した。

小穴状遺構 P23 は、直径約 0.7 m、深さ約 0.4 mを測る。

小穴状遺構 P33 は、直径約 0.6 m、深さ約 0.4 mを測る。

小穴状遺構 P45（第 18 図）は、長径約 1 m、短径約 0.7 mの円形に近い楕円形を呈する。深さは、約 0.5 mを測る。

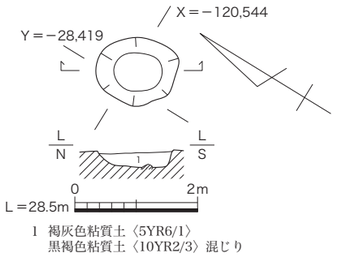
小穴状遺構 P46 は、直径約 0.5 mの円形になるものと思われるが、南半が掘立柱建物 SB03P7 に削られている。深さは、約 0.35 mを測る。断面は、やや袋状をなす。

＜縄文時代中期の遺構＞

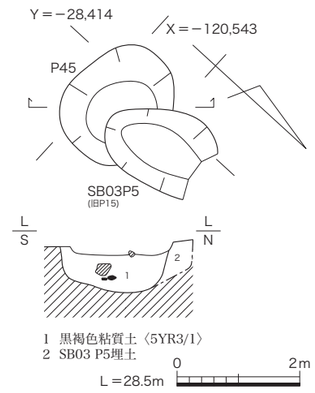
縄文時代中期後半の遺構には、調査区のほぼ中央で検出した浅い窪み SX01 と、そこから北に延びる溝状遺構 SD05 がある（第 19 図、図版一五（1））。

浅い窪み SX01 は、調査区南辺から三角形に検出した遺構で、西辺約 3 m以上、北辺約 4 m以上の方形または長方形になる可能性がある遺構の一部である。北辺の東端は、掘立柱建物 SB04P1 に削られている。深さは約 0.2 mで、北西方向に浅くなり、北西隅には、北に向かってのびる溝 SD05 が取り付く。埋土からは、浅い落ち込み SX01 と溝 SD05 との差異は観察できず、前後関係は明らかでない。この両遺構の重複部の遺構検出面からは、縄文土器がまとまって出土した（第 20 図、図版一五（2））。浅い落ち込み SX01 は、竪穴建物の一部の可能性がある。

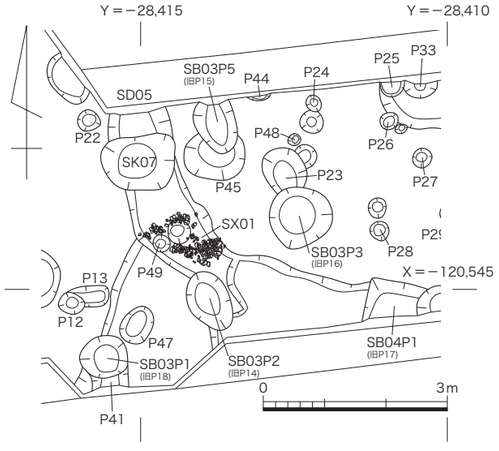
溝 SD05 は、幅 1 mを測り、浅い窪み SX01 との重複部では深さ約 0.1 mと浅く、調査区北端では深さ約 0.4 mと深くなる。北に向かって深さが増すと思われるが、溝底傾斜個所に縄文時代後期の土坑 SK07 があり、この土坑より北と南が別の遺構である可能性も考えられる。



第 17 図　土坑 SK02 実測図（1/10）



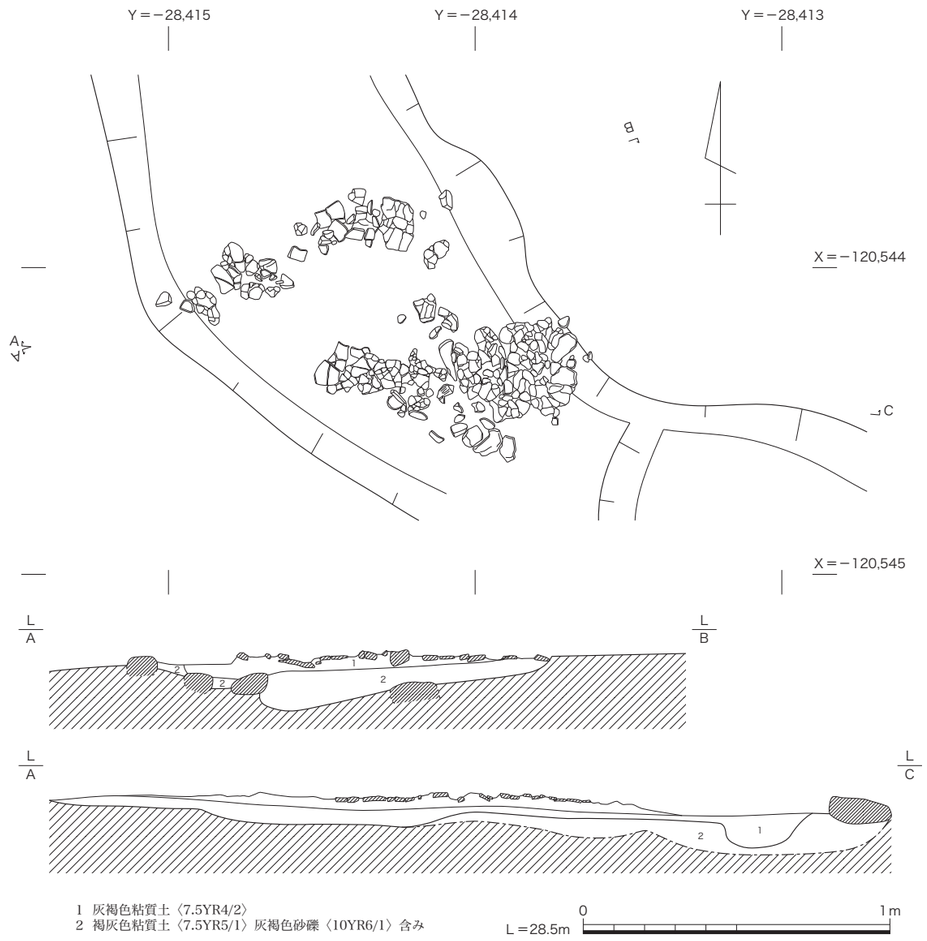
第 18 図　小穴状遺構 P45 実測図（1/10）



第 19 図　縄文時代中期の遺構平面図（1/100）

4　ま と め

今回の調査では、奈良時代〜飛鳥時代の建物跡 2 棟や小穴群、縄文時代後期の小穴状の掘り込



第 20 図　浅い落ち込み SX01 遺物出土状況（1/20）

みや土坑、縄文時代中期後葉の溝や浅い窪みなどを検出した。縄文時代中期後葉の土器がまとまって出土したことは特徴的と言える。

飛鳥〜奈良時代の遺構群の中で、掘立柱建物が検出されたのは意義深い。周辺部の調査が進めば、飛鳥〜奈良時代の伊賀寺遺跡の様相が具体的に浮かび上がってくると思われる。

縄文時代については、今回の調査で後期の小穴状遺構や土坑が見つかり、京都縦貫自動車道の調査で推測された土坑群の構築範囲がさらに広がることが明らかになった。一方で、中期後葉の浅い窪みや溝が見つかったことは、今まで推定されていた縄文時代中期の居住域の範囲を超えて、北の方向に広がることが確実となった。今回検出した浅い窪みは、竪穴建物の一部の可能性が考えられる。今後も当遺跡の調査を継続し、集落範囲や土地利用の在り方を具体的にとらえていく必要があろう。なお、出土遺物については、来年度に報告する。

付表－２　報告書抄録

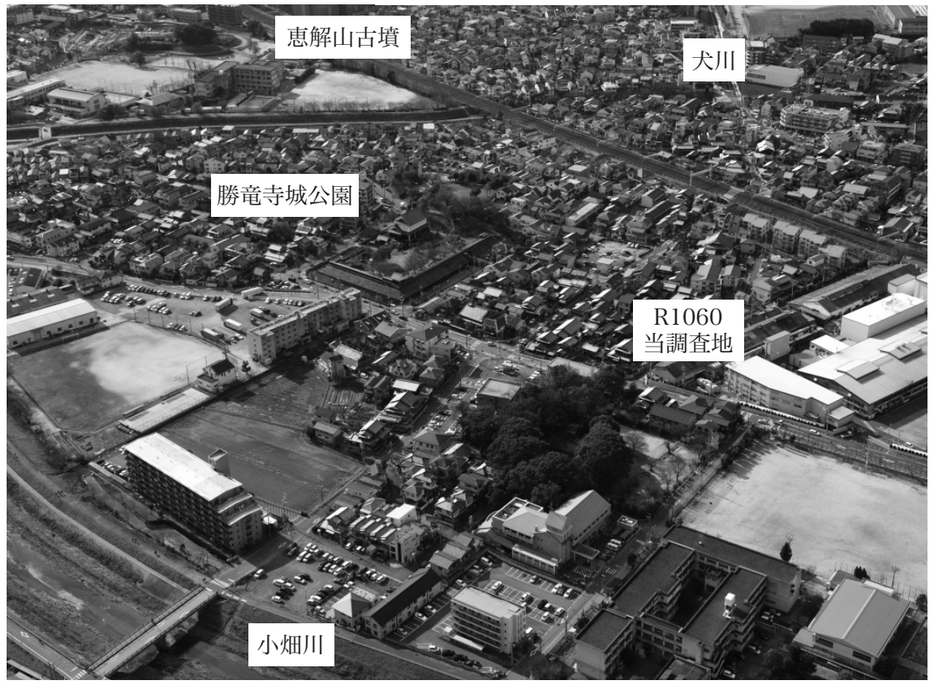
ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 66 冊
編著者名	岩﨑　誠、山本　輝雄
編集機関	公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒 617 － 0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 神足遺跡 中世勝龍寺城跡 神足城跡	長岡京市 東神足 二丁目地内	26209	107 93 84-1 82	34° 54′ 58″	139° 32′ 17″	20130617 ～ 20130813	48 ㎡	範囲確認 調査
長岡京跡 井ノ内車塚古墳	長岡京市 井ノ内向井芝 4	26209	107 2	34° 56′ 26″	135° 41′ 01″	20130809 ～ 20131002	63 ㎡	範囲確認 調査
長岡京跡 伊賀寺遺跡	長岡京市 下海印寺下内 田 13－1	26209	107 96	34° 54′ 46″	139° 31′ 20″	20131209 ～ 20140125	98 ㎡	範囲確認 調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 （右京第 1060 次） 神足遺跡 中世勝龍寺城跡 神足城跡	都城 集落 城館	室町時代 桃山時代	土塁、空堀	土師器、陶磁器	土塁・空堀・土橋の規模と構築方法の一端を掌握。
長岡京跡 （右京第 1068 次） 井ノ内車塚古墳	都城 古墳	古墳時代	墳丘西側くびれ部、造り出しないし墓道	普通円筒、朝顔形円筒、石見型、馬形、犬形、巫女形埴輪、土師器、須恵器、緑釉陶器、白磁	くびれ部に近接する後円部に造り出し又は墓道を付設していることが判明。
長岡京跡 （右京第 1078 次） 伊賀寺遺跡	都城 集落	縄文時代 飛鳥時代 奈良時代	小穴状遺構、土坑、浅い窪み、掘立柱建物	縄文土器、土師器、須恵器	北白川式一括土器が出土。縄文時代中期～後期の集落のひろがりを確認。

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

図　版



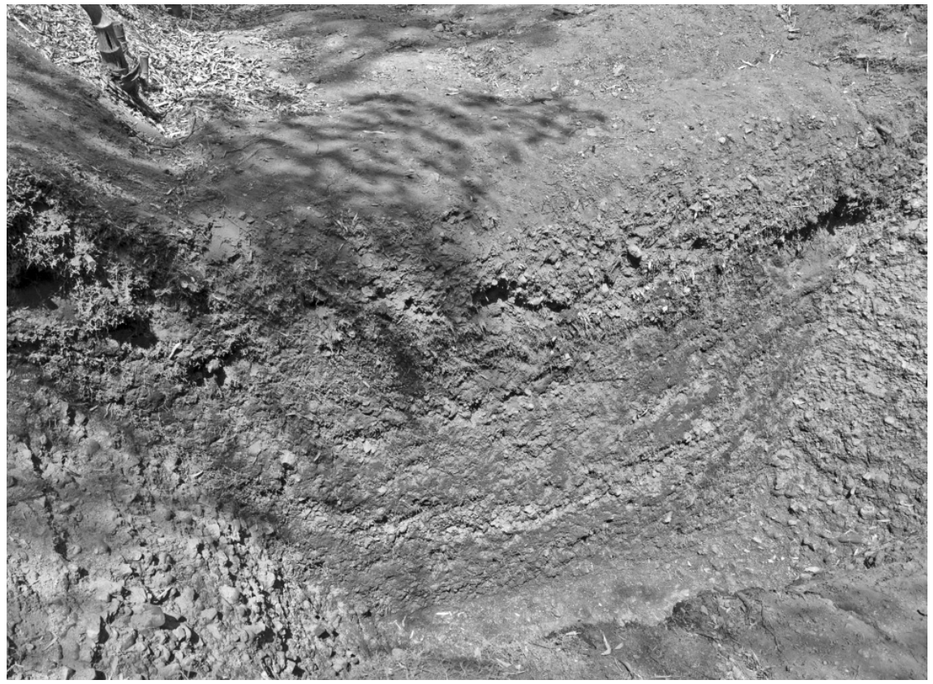
（1）調査区北辺調査前風景（北西から）

（2）南北土塁北崖面調査区（北西から）

（１）西・中央調査区全景（東から）

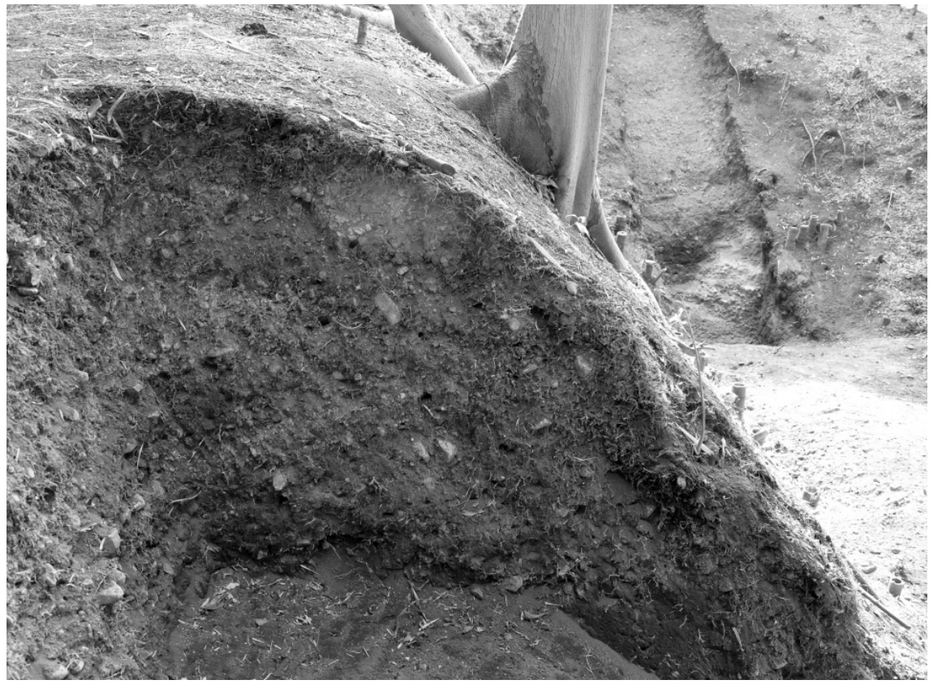
（２）西調査区東端北壁面の東西空堀堆積状況（南から）

（１）南北土塁構築以前の掘り込み SD02（東から）



（２）中央調査区中央部東西空堀堆積土層（南東から）

（1）中央調査区北端平坦面堆積層（東から）



（2）中央調査区南端東西土塁構築土層（東から）

（1）東調査区土橋構築土層（西から）

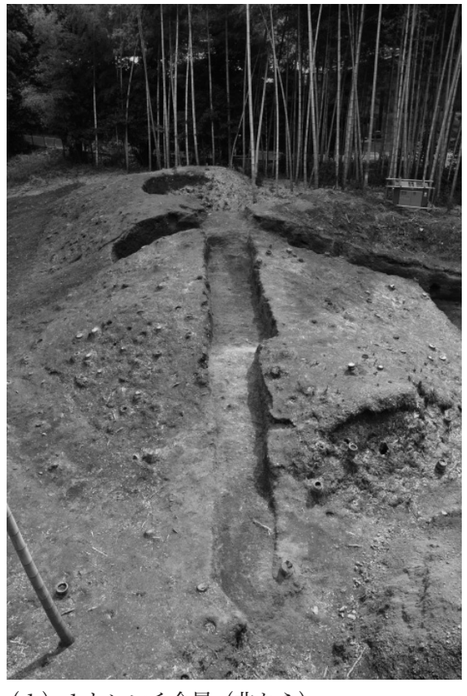
（2）調査後の土塁保護対策風景（北東から）

図版六

（１）調査区全景（北から）

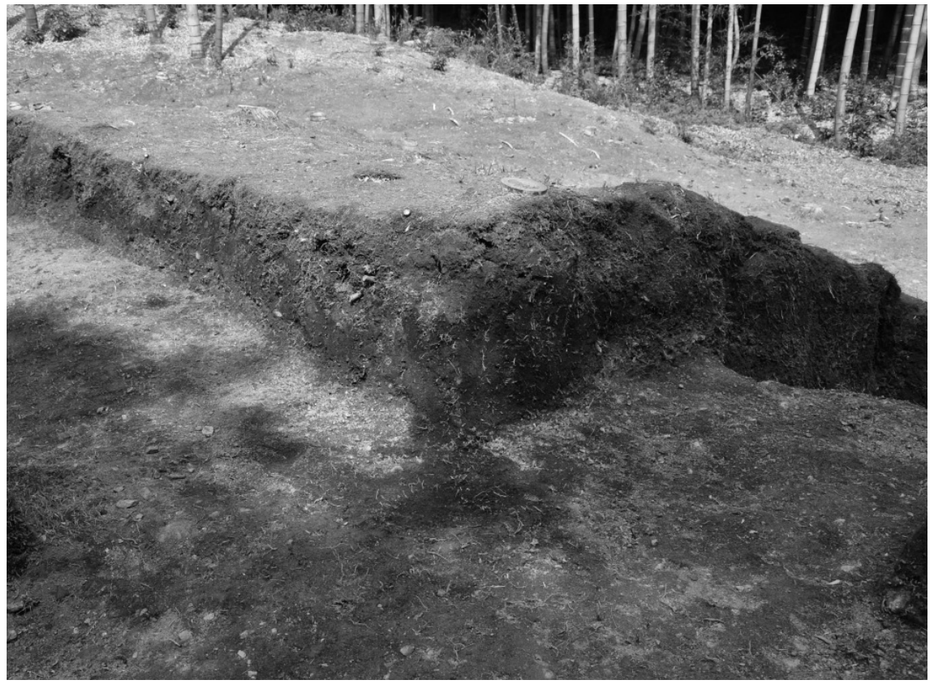
（２）調査区全景（南から）

図版七



（１）１トレンチ全景（北から）

（２）１トレンチ全景（南から）



（３）１トレンチ盛土堆積状況（南西から）

図版八

（1）２トレンチ全景（南から）

（2）２トレンチ全景（西から）

図版九

（1）造り出し又は墓道全景（南東から）

（2）造り出し又は墓道全景（東から）

（3）造り出し又は墓道全景（西から）

井ノ内車塚古墳第６次（長岡京跡右京第 1068 次）調査

図版一〇

（１）埴輪出土状況（北西から）

（２）埴輪出土状況（西から）

伊賀寺遺跡（長岡京跡右京第 1078 次）調査

図版一一

（１）調査区遠景（北西から）

（２）調査区遠景（南から）

（１）飛鳥～奈良時代の遺構群全景（西から）

（２）飛鳥～奈良時代の遺構群（東から）

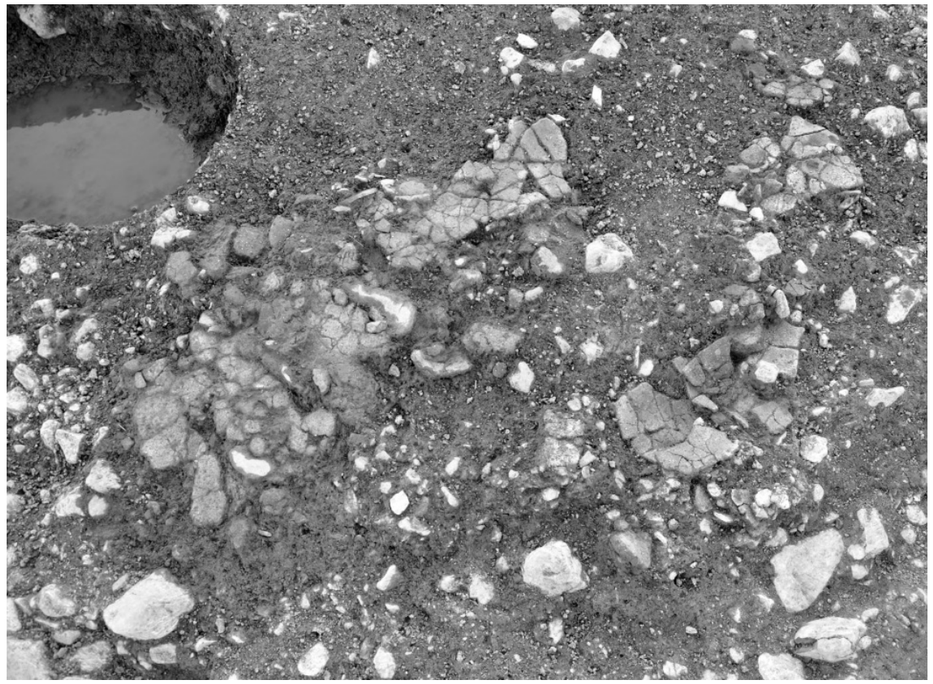
（１）掘立柱建物 SB03（南東から）

（２）掘立柱建物 SB04（南西から）

（1）小穴 P3 須恵器杯 B 出土状況（北から）

（2）落ち込み SX01・溝 SD05 検出状況（南東から）

（1）落ち込み SX01・溝 SD05 完掘状況（南西から）



（2）落ち込み SX01 縄文土器出土状況（北東から）

長岡京市文化財調査報告書 第 66 冊

平成 26（2014）年 3 月 25 日　発行

編　　集　公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒 617 – 0853　京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1
電話　075 – 955 – 3622　　FAX　075 – 951 – 0427
発　　行　長岡京市教育委員会
〒 617 – 0851　京都府長岡京市開田一丁目 1 – 1
電話　075 – 951 – 2121（代）
印　　刷　株式会社 ダイ
〒 604 – 8241　京都市中京区三条通新町西入ル釜座町 22
ストークビル三条烏丸 4F
電話　075 – 254 – 0646　　FAX　075 – 254 – 0647